

能楽に扱われている女性

野田和子

能楽の女性を扱っている曲に於ては、いかなる女性を、いかなる姿に描いているかについて考えてみたいと思う。
 先ず佐成謙太郎氏著『謡曲大観』記載の現行曲一覧表によつて各流の現行曲を数えてみると、「翁」を含めて観世流二〇八番、宝生流一八一番、金春流一五一番、金剛流二〇一番、喜多流一八一番になつてゐる。観世流に行われていないで他流に行われている曲が三二番ある。従つて延現行曲数は二四〇番になるわけである。この中「シテ」が女性の曲は次に掲げる九五番で、現行曲の約四割を占めてゐる。

曲名		前シ	後テ	曲名		前シ	後テ
飛鳥川	(剛) 喜原	友若	の母	右近	(観・宝) 剛	貴女	一櫻葉明神
安達原	(観) 以外黒塚上	老姫	一鬼女	采女		里女	一采女
葵上		六條御息所	一同鬼女	鶺鴒祭		海士女	一氣多明神
海士	(観) 以外海人	海士女	一龍女	梅枝	(観)	里女	一梅の精
藍川	(観) 染	京女	一天満天神	鱗形		里女	一富士の妻
井筒		里女	一紀有常女	江口	(剛)	女	一辨才天
浮舟	(観) 春・剛	里女	一浮舟	口喜		里女	一江口君

胡 (觀・宝・剛) 蝶 源 氏 (觀) 供 養 現 在 (觀) 七 面 吳 (宝) 服 祇 (觀・宝・剛・喜) 王 砧 (宝・剛・喜) 狂 賀 茂 (宝・剛・喜) 賀 (觀・宝・剛・喜) 輪 鐵 (觀・宝・剛・喜) 城 葛 柏 崎 杜 若 (剛・喜・伯母捨) 姨 (觀・宝・捨) 大 (剛・喜) 原 御 幸 (宝) 落 (剛) 葉 鸚 鵡 (觀・宝・剛・喜) 小 町

里 女 一 胡 蝶 精 里 女 一 紫 式 部 里 女 一 龍 女 織 里 女 一 吳 佛 御 前 一 同 靈 芦 屋 妻 一 同 妻 里 女 一 別 雷 神 京 里 女 一 同 鬼 女 神 里 女 一 葛 城 柏 崎 妻 一 同 狂 女 里 女 (杜若の精) 里 女 一 老 女 建 禮 門 院 一 同 里 女 一 雲 井 雁 小 野 小 町

當 (觀・六) 麻 第 (剛) 天 泰 山 府 君 卒 都 婆 小 町 (宝・剛・草子洗) 草 子 洗 小 町 (觀・春・喜) 千 手 蟬 (觀・宝・剛・喜) 丸 攝 (觀・宝・剛・喜) 待 殺 生 石 關 寺 小 町 西 王 母 誓 (觀・剛・喜) 願 寺 住 吉 詣 (觀・剛・喜) 隅 田 川 墨 (剛) 染 櫻 佐 (春) 保 山 櫻 川

化 尼 一 中 將 姬 里 女 一 第 六 天 魔 王 天 女 一 泰 山 府 君 小 野 小 町 小 野 小 町 一 同 小 野 小 町 一 同 千 手 前 逆 髮 宮 佐 藤 繼 信 (野千姿) 母 里 女 一 石 魂 小 野 小 町 女 一 西 王 母 里 女 一 和 泉 式 部 明 石 上 梅 若 の 母 里 女 一 墨 染 櫻 の 精 侍 女 一 佐 保 姬 櫻 子 母 一 同 (狂女)

檜 (觀・宝・剛・喜) 垣
 班 (剛・花形見) 女
 花 (春) 筐
 初 雪
 芭 蕉
 半 蔀
 羽 衣
 野 宮
 鳥 (宝・追) 追 舟
 巴 成
 道 寺
 東 北
 定 (觀・剛・喜) 家
 玉 井
 玉 葛
 谷 行
 龍 田
 竹 (宝) 喜 雪

老 女 一 檜 垣 女
 花 子 一 同 (狂女)
 照 日 前 一 同 (狂女)
 神 主 姫 一 鶏 の 精
 女 一 芭 蕉 精
 里 女 一 夕 顔
 天 女 一 六 條 御 息 所
 里 女 一 同
 日 暮 妻 一 同
 里 女 一 巴
 白 拍 子 一 同 蛇 體
 里 女 一 和 泉 式 部
 里 女 一 式 子 内 親 王
 豐 玉 姫 一 海 神
 女 舟 人 一 玉 葛
 松 若 母 一 伎 樂 鬼 神
 巫 女 一 龍 田 姫 神
 月 若 の 母 一 同

三 輪
 身 延
 水 無 (觀) 月 被
 水 無 (喜) 瀬
 三 (宝) 山
 三 井 寺
 松 (觀・宝・剛・喜) 風
 卷 (觀) 絹
 佛 (觀) 原
 船 辨 慶
 藤 (觀・宝・剛) 戸
 藤 (觀・春・剛・喜) 靜
 二 人 靜
 富 士 太 鼓
 富 士 山
 笛 之 卷
 百 萬
 雲 雀 山

里 女 一 三 輪 明 神
 女 の 靈
 室 君 (狂女)
 爲 世 妻 の 靈
 里 女 一 桂 子
 母 一 同 (狂女)
 松 風 子
 神 子
 里 女 一 佛 御 前
 靜 御 前 一 知 盛 亡 靈
 漁 夫 の 母 一 漁 夫 の 靈
 里 女 一 藤 の 精
 女 (靜 御 前)
 富 士 の 妻
 海 士 母 一 富 士 山 神
 常 磐 御 前 一 辨 慶
 百 萬
 乳 母 待 從 一 同 (狂女)

楊	熊	雪	夕	山	紅	求	室	六
貴	(剛)	(觀・剛・喜)			葉	(宝)	(觀)	
妃	野		顔	姥	狩	塚	君	浦

楊	熊	雪	里	里	貴	里	章	里
貴		の	女一	女一	女一	女一	提希	女一
妃	野	精	夕顔	山姥	鬼女	處女の靈	夫人	楓の精

吉	野	靜	靜	御	前
(觀・宝・春・剛)	野	天	女	一天	人
籠	太	鼓	關	清	次
					妻

○曲名五十音順(表音式)

○曲名の左に注のないものは五流に行われている曲

○観は觀世流・宝は宝生流・春は金春流・剛は金剛流

喜は喜多流

○曲名・役柄は謠曲大観による

これを能柄別に見ると次の通りで、協能物は全曲四〇番ある中で「シテ」が女性の曲は九番、二番目物は十八番ある中で一番、三番目物は三八番ある中で三七番、三・四番目物は七番ある中で四番、四番目物は八二番ある中で三二番、四・五番目物は十四番ある中で六番、五番目物は四〇番ある中六番である。

二番目物の一番は「巴」で、巴御前は武人として扱われているわけである。三番目物に一番だけ「シテ」が女性でない曲がある。これは「遊行柳」で、同じように草木の精を「シテ」に扱った梅「杜若」「墨染櫻」「芭蕉」「藤」「六浦」はいずれも「シテ」が女性である。これらは梅、杜若、桜、藤など美しい花の咲くものや、楓のように美しく紅葉するものであるから女性として扱ったとも考えられるが、それならば「芭蕉」の「シテ」が女なのはなぜかということになる。尤も遊行柳の精は西行法師が道のべに清水流るる柳陰と詠まれた柳の精であって、西行法師と結びついているから男性にしたのだと言うことはできよう。

脇能物……鶺鴒祭。鱗形。右近。賀茂。吳服。佐保山。西王母。玉井。富士山。

二番目物……巴。

三番目物……井筒。梅。采女。江口。鸚鵡小町。落葉。大原御幸。姨捨。杜若。葛城。祇王。源氏供養。胡蝶。

墨染櫻。住吉詣。誓願寺。關寺小町。千手。草子洗小町。卒都婆小町。龍田。定家。東北。野宮。

羽衣。半蔀。芭蕉。初雪。檜垣。二人靜。藤。佛原。松風。身延。六浦。楊貴妃。夕顔。雪。

熊野。吉野靜。吉野天人。

四番目物……葵上。藍染川。飛鳥川。浮舟。梅枝。柏崎。鐵輪。賀茂物狂。砧。現在七面。櫻川。隅田川。

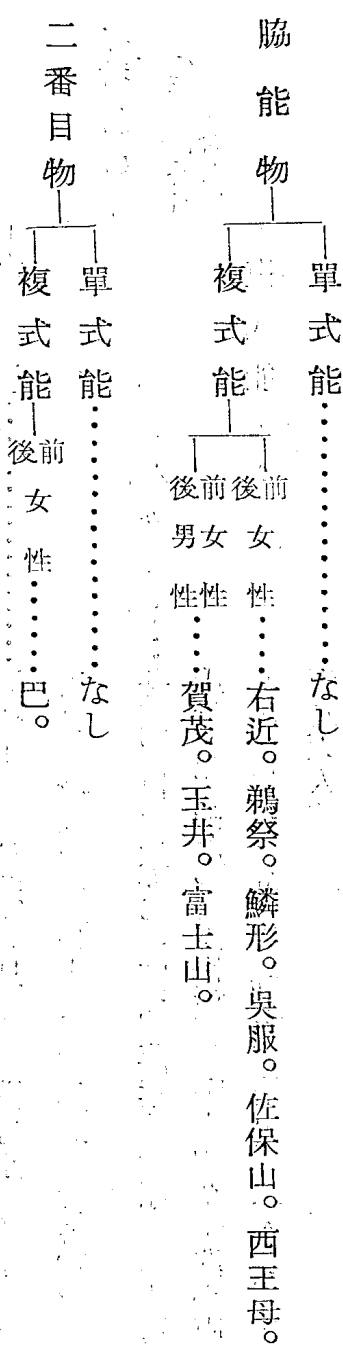
殺生石。攝待。蟬丸。泰山府君。當麻。竹雪。谷行。玉葛。道成寺。鳥追舟。花筐。

班女。雲雀山。百萬。笛之卷。富士太鼓。藤戸。卷絹。三井寺。三山。水無瀬。水無月被。三輪。

室君。求塚。籠太鼓。

五番目物……安達原。海士。第六天。船辨慶。紅葉狩。山姥。

次にこれらの曲を能形式によつて分類する。単式能は「シテ」の中入しない曲、複式能は中入のある曲である。



三番目物

(三・四番目物を含む)

單式能

鸚鵡小町。杜若。住吉詣。關寺小町。千手。卒都婆小町。羽衣。松風。身延。楊貴妃。雪。熊野。吉野靜。

後女性

井筒。梅。采女。江口。落葉。大原御幸。姨捨。葛城。祇王。源氏供養。胡蝶。墨染櫻。誓願寺。草子洗小町。龍田。定家。東北。野宮。半菰。芭蕉。初雪。檜垣。二人靜。藤。佛原。六浦。夕顔。吉野天人。

前女性
後男性

なし

四番目物

(四・五番目物を含む)

單式能

飛鳥川。賀茂物狂。隅田川。攝待。蟬丸。百萬。卷絹。富士太鼓。水無瀬。水無月祓。室君。籠太鼓。

後女性

葵上。浮舟。梅枝。柏崎。鐵輪。砧。現在七面。櫻川。當麻。竹雪。玉葛。道成寺。鳥追舟。花篋。班女。雲雀山。三井寺。三山。三輪。求塚。

前女性
後男性

藍染川。殺生石。泰山府君。谷行。笛之卷。藤戸。

五番目物

複式能

前女性
後女性
前男性
後男性

安達原。海士。紅葉狩。山姥。第六天。船辨慶。

單式能

なし

次にこれらの曲の「シテ」になっている女性はいかなる人物であるか、又いかなる姿に描き出されているかについて考えてみたい。

協能物で「シテ」になっている女性は、ほとんど「前シテ」では名もない女性であつたのが——右近は貴女、玉井は豊玉姫——「後シテ」では真の姿をあらわし神体となつて現れ、神楽その他の舞を舞つて奇特をあらわしたり、御代を壽いだりするのである。「後シテ」が男の神になつてゐるものは、神体をかりに此の世にあらわしてゐた「前シテ」の女性は、後の場では「ツレ」又は「子方」として「後シテ」と行動を共にしてゐる。

二番目物で「シテ」になつてゐる女性は前に述べたように巴御前だけで、巴は軍物語の後、義仲が「最後まで召し具せざりしその恨み」の執心を弔つてくれと言つて姿を消す。

三番目物、四番目物に扱われている女性について考えるための一方法として、その人物を次の様に分類する。

三番目物（三・四番目物を含む）

(一) 神又は超人間的なもの

葛城。龍田。羽衣。吉野天人。

(二) 非情のもの精

(イ) 草木の精：梅。杜若。墨染櫻。芭蕉。藤。六浦。

(ロ) 虫の精：胡蝶。

(ハ) 鶏の靈：初雪。

(ニ) 雪の精：雪。

(三) 歴史上の人物

鸚鵡小町。關寺小町。草子洗小町。卒都婆小町。源氏供養。誓願寺。定家。東北。楊貴妃。

(四) 物語中の人物（歴史上の人物で物語に扱われているものを含む）

井筒。采女。江口。落葉。姨捨。大原御幸。祇王。住吉詣。千手。野宮。半菰。檜垣。二人靜。佛原。松

風。夕顔。熊野。吉野靜。

(五)その他

身延。

四番目物 (四・五番目物を含む)

(一)神又は超人間的なもの

當麻。泰山府君。卷絹。三輪。室君。

(二)非情のものゝ靈

現在七面。殺生石。道成寺。

(三)物語中の人物

葵上。浮舟。鐵輪。玉葛。花篋。笛之卷。三山。求塚。

(四)尋ねる人をさがす人物

(イ)我が子を尋ねる母……柏崎。櫻川。隅田川。攝待。竹雪。百萬。藤戸。三井寺。

(ロ)子に捜される母……飛鳥川。

(ハ)夫をさがす妻……梅枝。賀茂物狂。砧。鳥追舟。班女。富士太鼓。水無月祓。籠太鼓。

(ニ)弟をさがす姉……蟬丸。

(ホ)その他……水無瀬。

(五)その他

谷行。雲雀山。

三番目物、四番目物の中で複式能の場合は、「前シテ」は殆ど名もない女として扱われているが、これが実は「後

シテ」が姿をかえてあらわれていたもので、「後シテ」となって正体をあらわすのである。

三番目の中で神又は超人間的なものが「シテ」になっているのは、すべて女神か天人で、舞をまっぴら姿を消すもので協能に準じるものである。非情のものの精を扱っている曲には大体二つの型が考えられる。その一つは「杜若」「墨染桜」「芭蕉」「六浦」のように草木国土悉皆成仏又は胡蝶のように歌舞菩薩となって成仏するものと、他の一つは「梅」「藤」「雪」のように舞を奏し喜びをのべて姿を消すものである。歴史上の人物と物語中の人物とは明確に区別できるものではなく、小町物のように出典となっている物語のない実在した人物を一応区別したので、広く解釈すれば一項目になるものである。小町物は四番中三番まで老後の小町を扱っていて、いずれも往時を回顧するあわれな姿を描いているが、「卒都婆小町」では最後に仏道に入っている。「草子洗小町」だけは歌合における華やかな姿の小町を描いている。小町物には此の他深草少将を「シテ」にした「通小町」がある。小町物以外の曲を眺めると、「井筒」「采女」「住吉詣」「千手」「定家」「野宮」「半部」「松風」「夕顔」は恋愛を扱ったものであるが、これらの曲に於いて恋愛はすべて今は此の世にない女性が、その昔の此の世における恋愛を、その当時の現実の姿で——実在の人物ではなく架空の人物も多いが——演じるのである。多くは「ワキ僧」の夢の中と言う非現実の世界で、現実のものとして恋愛を演じているのである。小町物の中「卒都婆小町」も恋愛を扱ったものであるがこの曲だけは、昔物語ではあるが現実には生きている人の恋愛である。

これらの曲の恋する女性は、最後にどうなっているかと言うと、「井筒」「住吉詣」「千手」ではそれ／＼業平と有常の女、源氏の君と明石の上、重衡と千手、の恋を淡々と物語っているだけで終っている。「野宮」「半部」「松風」では妄執深き姿を恥じて、「ワキ僧」に回向を頼んで姿を消している。「采女」「定家」「夕顔」はワキ僧の弔いで成仏はしているが、「采女」と「夕顔」は変成男子となって成仏している。女の姿のまゝでは罪が深くて成仏できないのである。「定家」だけは女のまゝ成仏するがこれは「シテ」が貴人であるからなのであろう。

「江口」「東北」「檜垣」「熊野」は和歌もしくは和歌の道が題材になっているもので、和歌の功德によって成仏したり、事が成立したりしている。先に述べた小町物の中「鶯鷓小町」「關寺小町」「草紙洗小町」もこの類である。

物語中の女性が「シテ」になっている曲の出典について考えてみると、源氏物語の中の女性を扱ったものが四番あるのは鬘物として当然のことであるが、平家物語を典拠にしたものが四番、義経記を典拠にしたものが二番あることは、鎌倉時代の軍記物語の性格を物語っていると見えよう。

四番目物は狂物と呼ばれているように、尋ねる人、特にわが子や夫を捜す女性を扱った曲が半以上を占めている。わが子をさがす母親で無事生きていく子供に会うものは、「柏崎」「櫻川」「百萬」「三井寺」、子供がこの世に亡きものとなっていて菩提を弔うのが、「隅田川」「攝待」「藤戸」「竹雪」は既に亡き子が蘇生して再会を喜ぶ劇的な趣向をこらしている。母親が捜される型のもは「飛鳥川」だけで、これは無事にあっている。夫をさがす妻で再会するのは、「賀茂物狂」「鳥追」「班女」「水無月被」「籠太鼓」で、「藍染川」は会えないで身を投げた女が蘇生して再会する。「砧」では亡霊となって会っている。結局会えないで終るのは「梅枝」と「富士太鼓」である。そうすると三番目物では恋愛を否定し成仏させなかった能作者は四番目物では恋愛を肯定しているかに見えるが、「班女」以外の曲の男女の間柄は、子供のあるものもあって、道ならぬ戀をしている男女ではなくて、明確な夫婦と考えられる。

四番目物の中で物語中の人物が「シテ」になっている曲について見ると、「玉葛」「笛の巻」以外は戀愛を扱って、めでたい結果となるのは「花籠」の照日前だけで、「葵上」と「浮舟」とは僧の回向によって成仏しているが、その他は、捨てられた女が鬼神となって夫を連れて行くとするが三十番神に追いたてられる「鐵輪」、同じ男に思いをかけた二人の女が妄執に苦しむ「三山」、二人の男に思われて地獄に苦しむ菟日処女を描いた「求塚」など、いずれも成仏できず苦しむ女の姿である。三番目物に扱われている戀愛に比して、これらはより一層妄執深き故に能作者はこれらの女性を救わなかつたのであろう。

四番目物の中で「前シテ」が女性で「後シテ」は男性の曲の「後シテ」は「笛之卷」以外は神又は超人間的なものである。

六条御息所を「シテ」にした曲に三番目物の「野宮」と四番目物の「葵上」があるが、この二曲を比べてみると、「野宮」の六条御息所は賀茂の祭の車争いを語るにも「よしや思へば何事も、報いの罪はよも洩れじ、身は猶牛の、小車のめぐりめぐり来ていつまでぞ妄執を晴らし給へや、」と恨みの心もこれは前世の罪の報いとあきらめる余裕をもち貴人のつゝましやかさを失わず、自ら迷いの心を晴してほしいと僧に頼んでいる。これにひきかえて「葵上」の六条御息所は上臈の姿はしても「夕顔の、宿の破れ車、やる方なきこそ悲しけれ」と失戀の歎きをのべ、照日の神子の口寄せに「身の憂きに人の恨みの猶添ひて、忘れもやらぬわが思ひ、せめてや暫し慰むと、梓の弓に怨靈のこれまで現れ出でたるなり、」とだん／＼恨みの心がつのって、「恨みは更につきすまじ」とうわなり打をはじめ瞋恚の焰をもやし、「枕に立てる破れ車うち乗せ隠れ行かうよ、」と葵上をつれて行かぬ限りは恨みは晴れないと凄じい鬼の心になって行く。「後シテ」の鬼の姿となって現われた怨靈は行者の読誦の声を聞いて心を和らげて成仏得脱の身とはなるが、優雅な「野宮」の趣とは全く異つた変化に富んだ曲で、他の源氏物には見えない強さを持っている。源氏物語に描かれている六条御息所は、「思しつゞくれば、身一つの憂き歎きよりほかに、人を悪かれなど思ふ心もなけれど、物思ふにあくがるなる魂は、さもやあらむと思し知らるゝ事もあり。としごろ、萬に思ひ残す事なく過じつれど、斯うしも碎けぬを、はかなき事の折に、人の思ひ消ち、無きものにもてなす様なりしみそぎの後、ひとふじに憂しと思しうかれにし心、しづまり難う思さるゝけにや、少しもうちまどろみ給ふ夢には、かの姫君とおぼしき人の、いと清らにてある所に往きて、とかく引きまさぐり、現にも似ず、たけく厳きひたぶる心いできて、打ちかなぐるなど見え給ふ事、度重りにけり。あな心うや、實に身を捨ててや往にけむと、現心ならず覺え給ふ折々もあれば、然ならぬことだに、人の御爲には、よきさまのことをしも言ひ出でぬ世なれば、まして是は、いとよく言ひなしつべき便

なりと思すに、いと名たゞしう、ひたすら世に亡くなりて後に恨殘すはよのつねの事なり。それだに人の上にては、罪深うゆゝしきを、現の我身ながら、さる疎ましき事をいひつけらるゝ、宿世の憂き事、すべてつれなき人にいかで心もかけ聞えじ、と思しかへせど、思ふも物をなり。」のように、嫉妬の餘り我が心からではなく、魂が生靈となつて葵上についたことを我ながら淺ましいことゝ歎いている。又いよ／＼葵上御出産の時現われた生靈は、「かく参り來むとも更に思はぬを、物思ふ人の魂は、實にあくがるものになむありける……云々」と、我が心からでなく物思ふ人の靈が迷い出たものであると言つてゐる。最も嫉妬が強く現われているのは、「かの御息所は、かゝる御有様を聞き給ひても、たゞならず。かねてはいと危く聞えしを、平かにもはた、とうち思しけり。」と葵上の出産を聞いて妬ましく思われた箇所であるが、源氏物語の作者はこの頃の御息所は、「御ゆるす」や「御衣着かへ」をなさつても、御衣は「芥子の香」にしみてゐると、正氣の状態ではないとの説明を添えてゐる。それに比べると、能樂「葵上」に扱われている六条御息所は、最後で成佛をさせてゐるので救われてはゐるが、前シテの上臈姿と、「後シテ」の鬼女の姿との對照も手傳つて、はるかに凄味を帯びた嫉妬に狂う姿である。

五番目物では、「安達原」と「紅葉狩」の鬼女はいずれも山伏に祈り伏せられたり退治される。「海士」はわが子の立身の為に命をすてゝ、龍宮から宝珠を取り返して來た「シテ」が、後の場で龍女となつてあらわれ、今は大臣となつてゐる我が子の供養をうけて成仏の喜びを語る。「第六天」と「船弁慶」は前後で「シテ」の性が變つてゐるが、「第六天」の「前シテ」里女は第六天の魔王の靈が姿をあらわしたものであつたのである。「船弁慶」は「前シテ」が義経と大物浦で名残を惜しむ靜御前であり、「後シテ」は義経を海中にひき入れようといどみかゝる知盛の靈で、前の場と後の場がすっかりきりはなされていて對照の面白さをもつてゐる。

以上「シテ」が女性の曲について述べたが、「シテ」が男性で「ツレ」が女性の曲に於ける「ツレ」について考えて見よう。曲目を能柄別に挙げると次の通りである。

協能物

曲名		前	後
嵐山	剛外	老翁一藏王權現	老嫗一勝手神
内詣	剛	大神宮主	大神宮神子
江島	觀	漁翁一五頭龍王	漁夫一辨才天
繪馬	觀 觀·宝·剛·喜	老翁一天照大神	姥一天銅女命
大社	觀·剛·喜	老社人杵築大神	社人一天童神
九戸	觀·世·高	漁翁一龍神	漁夫一天童女
源太夫	觀·太	老翁一源太夫神	老姥一天橋姬
逆承	觀·春	老翁一瀧祭神	男一天童女
白髭	觀·春	漁翁一白髭明神	漁夫一天童神
高砂	觀·春	尉一住吉明神	姥一天童
竹生島	生	漁翁一龍神	女一辨才天
東朔	觀·方·春	老翁一東方朔	男一天西王母
道明寺	觀·明·喜	老翁一白太夫神	宮人一天童女
難波	觀·剛·喜	老翁一王仁	男一天童女
寢覺	觀	老翁一三歸翁	里人一天童女
氷室	觀	氷室守翁一氷室神	男一天童女
和布刈	觀·宝·剛·喜	漁翁一龍神	海士女一天童女

二番目物

四番目物
(四・五番目
物を含む)

碇(観) 潜
清(観) 經
朝 長
芦 刈
綾(宝) 鼓
雨(宝) 月
善(喜) 知(喜) 鳥
鳥(喜) 帽(喜) 子(喜) 折(喜)
女(観) 郎(宝) 花(喜)
大 蛇
景(宝) 剛(喜) 清
通 小 町
咸 陽(観) 宮(喜)
草(宝) 薙
小 督
小 袖 曾 我
戀(観) 重 荷
正(観) 宝(剛) 喜(尊)

漁 翁 一 平 知 盛
平 清 經 靈
長 者 一 源 朝 長 靈
日 下 左 衛 門
御庭掃老人 一同 怨 靈
老 翁 一 住 吉 社 人
獵 師 靈 一 同
烏 帽 子 屋 一 熊 坂 長 範
老 翁 一 小 野 賴 風
手 摩 乳 一 八 岐 大 蛇
景 清
秦 始 皇
花 賣 男 一 日 本 武 尊
源 仲 國 一 同
曾 我 十 郎
山 科 莊 司 一 同 靈
正 尊 一 同

二 位 尼 一 大 納 言 局
清 經 妻
長 者 侍 女
同 妻
女 御 一
老 姬 一
—— 獵 師 妻
烏 帽 子 屋 妻 一 熊 坂 輩 下 の 者
—— 賴 風 妻
脚 摩 乳 一
人 丸
里 女 一 小 野 小 町
花 陽 夫 人 侍 女
花 賣 女 一 橘 姬
—— 小 督
曾 我 五 郎 鬼 王 団 三 郎 母
女 御 一
義 經 巨 一 姉 和

五番目物

通	松	土	昭	項	絃	國	一	望	船	鉢	錦	錦	大	禪
(觀・山・剛・盛)	山	蜘蛛	君	羽	上	(觀・春・喜)	角	月	橋	(觀・寶)	戸	(春・佛・觀)	會	師
盛	鏡	蛛	君	羽	上	喜	人	月	橋	木	戸	木	養	我
漁	俱	僧	白	老	老	老	一	小	男	佐	泉	男	景	
翁	生	形	桃	舟	翁	翁	角	澤	野	常	三	清	清	
一	生	一	一	人	一	一	仙	友	世	同	郎	一	一	
平	神	土	單	一	村	藏	人	房	同	男	同	男	同	久
通	神	蜘蛛	干	項	上天	王		同	の	の		の	の	上
盛	神	蛛	靈	羽	皇	權		同	靈	靈		靈	靈	禪
						現								師
海	母	胡	源	王		老	旋	安	女	常	泉	女	景	曾
士	の	賴	光	母		藤	陀	田	妻	世	の	妻	清	我
女	の	蝶	一	一		原	夫	友	一	一	一	一	母	母
一	小	一				師	人	治	女				一	一
小	宰					長		妻	の				一	一
宰	相					一		一	靈				一	一
相						竜		一					一	一
						同		女					一	一
						神		女					一	一
								人					一	一

これらの曲の「ツレ」と「シテ」との関係は、脇能物では、「高砂」の姥、「東方朔」の西王母、「源太夫」の橋姫
 以外は、大体「後シテ」の神と一对の女神の類である。二番目物では三番ともその関係はまち／＼である。四番目物
 では、「シテ」の恋うる女性であるのが、「綾鼓」「通小町」「恋重荷」「船橋」妻正式の妻の意ではないであるも

のが、「芦刈」「雨月」「善知鳥」「烏帽子折」「女郎花」「咸陽宮」「草薙」「錦木」「錦戸」「鉢木」「望月」で最も数が多い。その他は「景清」では娘、「小袖會我」「禪師會我」「大佛供養」では母、「正尊」では姉である。「小督」では「シテ」が小督の行方をさがす勅使であつて他の曲と趣を異にしている。

「通小町」と「小督」は曲名が示しているように、「ツレ」の小町・小督局が曲の中心になっている。「通小町」の「シテ」深草少将は前の場には登場しないで、「ワキ僧」と「ツレ」の間答で前の場は終つてゐる。後の場では「ツレ」が小町の姿で登場、僧に「戒授け給へ」と頼むのを聞いて、「シテ」が現れ、終は一人とも僧の回向で成仏するので、「シテ」の活躍の面は少い。「小督」に於ても「シテ」は曲の筋から言つて従の立場にある。

次に「シテ」が女性の曲で「ツレ」のあるものについて考えて見ると、「ツレ」のある曲は三十四番ある。その中で「ツレ」が男性の曲は、「攝待」「蟬丸」「千手」「卷絹」の四番と、「第六天」のように「前シテ」は女性でこれに従う「ツレ」は女性であるが、「後シテ」が男性でこれに従う「ツレ」が男性のものと、「鶉祭」のように「シテ」は前後とも女性で、「ツレ」が「前」は女性「後」は男性のものと、「大原御幸」「草子洗小町」「住吉詣」のように女性の「ツレ」と男性の「ツレ」と両方をもつてゐる場合と以上四種がある。「ツレ」の本体として「シテ」に従属する者が普通であるが、「大原御幸」の「ツレ」後白河院、「住吉詣」の「ツレ」光源氏、「千手」の「ツレ」平重衡はその点では例外である。三番目物の中で男女の情を扱つた曲で相手の男性が「ツレ」に扱われているのは「住吉詣」「千手」の二番だけである。「ツレ」が女性の曲は、前述の「鶉祭」「第六天」「大原御幸」「草子洗小町」「住吉詣」を含めて三十番、その中二十四番は「ツレ」が「シテ」の侍女か、「シテ」に従属する人物である。あとの六番の中、「祇王」「松風」「三山」の三番は「シテ」と対等の立場にある女性を「ツレ」に扱つてゐる。「祇王」は曲名が祇王であるのに「シテ」は仏御前で、祇王が「ツレ」に扱われているが、このことは祇王の立場を一層効果的に表現してゐると言えよう。他の三番は「葵上」「山姥」「二人靜」であるが、「葵上」の「ツレ」は「シテ」の六条御息所の生

靈を呼びよせる照日の神子、「山姥」の「ツレ」は「シテ」の山姥に対して遊女山姥、「二人静」の「ツレ」菜摘女は後の場では静御前の靈がのりうつって「シテ」と同じ静御前になって、二人の静御前が「しづやしづしづのをだまき……」の舞をまうので、これは「ツレ」の取扱いの中で異色のものである。

以上は能作者の別は全く考慮に入れないで、たゞ能楽ではいかなる女性がいかなる姿に扱われているかを、できるだけいくつかの型にまとめてみることによって、能作者の女性観をうかゞおうとしたものである。